

# I 東国の風景論



## 1 『更級日記』上京の記の表現について

### 一

『更級日記』の冒頭に置かれた上総国からの上京の旅の記は、作者菅原孝標女十三歳の秋冬、九十日程の事が書かれているが、五十数年に及ぶ作者の人生の回想であるこの日記全体の中で約二割もの分量を占めており、量的にも、内容的にも特異な部分とされている。この旅の記における表現の特徴について検討し、その背景にある作者の心情を探ってみたい。

上京の旅の記、九月十五日の条に次のようにある。

同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、下総しもつさの国のいかだといふ所にとまりぬ。庵いはなども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、おそろしくて寝いも寝られず。野中に、丘だちたる所に、ただ、木ぞ三つ立注(1)てる。

「下総しもつぎの国のいかだといふ所」とある「いかだ」は地名で、『和名抄』に見える千葉郡の「池田」の転訛あるいは誤写かと推定されており、「庵いはなども浮きぬばかりに雨降り」との連想で、川に流す「筏」を掛けた言語遊戲の表現と指摘されるのは周知の通りである。問題なのは、「野中に、丘だちたる所に、ただ、木ぞ三つ立てる」といういわくありげな表現である。

文章としては一見簡単なこの部分について、かつて阿部秋生氏は「どういふ必要があるのか、よくわからない表現」、「いかた」の叙景であることはわかるのだが、何のための叙景なのかはつきりしない」と述べ、このように前後の文脈と論理的につながりを欠く表現のため、『更級日記』の文章は「別にむずかしい文章ではないが、案外作者の意図がわからなくなる所の多い文章である」と指摘された<sup>注2</sup>。また、高橋文二氏は、これを「即物的な風景描写」とし、「王朝の観念世界の緊張を維持してきた意識の弛緩と、そのことによって露呈されてきた意識のむこう側の素肌の世界の現出」という事態における特異な風景描写とされている<sup>注3</sup>。秋山虔氏も「野中の丘の豪雨のなかの三本の木などの印象は、貴族文学の伝統的自然観から抜け出た目と心を感じさせる」と述べておられる<sup>注4</sup>。

作者は、この部分も含め、川の中の四本の柱や三筋の葵など数量的表現に対してこだわりを持つようだが、それについては、「他の誰でもない作者の記憶の中にしか存在し得ない、かけがえのない事実として、切実な意味を持ち得たのだ」とする伊藤守幸氏の論もある<sup>注5</sup>。

一見何気ない文章であり、表現であるが、ここに描かれた風景には、作者の極めて個性的な、特異な感覚が書き込まれているように思われる。そこで、以下、この「ただ、木ぞ三つ立てる」という表現について、「木」と、「三つ」という数とに分けて考えてみたい。

## 二

まず、「三つ」という数字について確認しておきたい。多田一臣氏はこの部分の描写について、

具体的にどのようなイメージに支えられた風景であったのかは、この記述からは明瞭にかがうことはできない。しかし、この丘の上に立つ三本の木の印象が、後年まで作者の心の中に屹立する鮮明な映像として、この(E)の部分（九月十五日の条——筆者注）全体の記憶の鍵となっている

とし、記憶を甦らせる鍵言葉として「ただ、木ぞ三つ」はあつたと述べておられる<sup>注6</sup>。しかし、三という数字そのものの意味には触れられていない。上京の旅の記には、これ以外にも数字、それも特に三という数字を使った表現がしばしば見られる。ところが何故三という数字なのかについては、あまり議論が無いように思われる。そうした中で、小谷野純一氏はその意味につ